
IS 一角と少年 につ!

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 一角と少年 につ！

【Nコード】

N1034X

【作者名】

楚良

【あらすじ】

今度は夢じゃなく、現実。
もう一度、物語を始めよう！
本当の僕の物語を！

『IS 一角と少年』の続きです。

そちらを見ても楽しめますが、見なくても楽しめるように書きたい
と思います。

プロローグ（前書き）

どうも、作者の楚良です。

当小説は『IS 一角と少年』の続きです。

まあ、前作は夢オチだったので、今度は現実です。

しかもISがいろいろごっちゃだったんですが、今回は正真正銘、ユニコーンガンダム一筋で生きたいと思います。

完結へ向けて、気合と根性、そして勢いで頑張りたいと思っているので、応援よろしくお願いします！！

プロローグ

少し前に、夢を見た。

自分がIS学園に行つて、いろんなことをする夢。

正直、馬鹿げてた。

一角のワンオフなんて、発動させたことなかったし。
第二形態なんて行けるはずもなかった。

だって、僕は本当は弱虫で、意気地無しで、ISに乗って戦闘なんてできないんだから。今まででのISの稼働時間なんて、一日はあ
るか、半日にも満たない。だからワンオフやら第二形態とは、ぶっ
ちやけたらほとんど無縁だ。

でも、今度は違う。

夢でも、幻でも、何でもない。現実だ。

本当の本当に、正真正銘、正式にIS学園に入学する。

男でISを動かせるなんて、僕だけだ。

夢で見たあの優しそうな男の人は今の今まで公表すらされていない。
それはつまり、僕だけ、ということなのだ。

別に気にはしてない。

ただ、1人はやっぱりさみしいだろうなあ、そう思ったただけだ。

「今日からここで3年間、かあ・・・」

何事もなく、とはいかないと思うけど、出来るだけ平和に過ごした
い。

そんな僕の願いは、入学初日に砕かれたのだった。

プロローグ（後書き）

次回はとりあえず、キャラ紹介。

主人公とヒロイン（一夏）と使用IS紹介です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

キャラ紹介

名前：アルフォンス・ラプラス（愛称はアル

性別：少年（男の娘

年齢：13歳（飛び級

性格：人の前では強気だったりするが、実は弱虫で意気地なし

基本優しいが、怒ったら物凄く怖い

容姿：後ろ髪が少し長めのセミロング

備考：フランス出身の男の娘で本作主人公。

家族はいない。1人旅の途中中東になぜか興味を持たれてついて行く。束の身の回りの世話をすることから料理や家事が得意。

意外に努力家で飛び級ができるほど頭が良かったりもする。

誕生日は4月9日。琥珀色の髪と瞳で、身長にみあわず物凄い大食漢。

後ろ髪がなぜか長くて、ゴムでまとめている。1人旅で鈴と千冬とラウラ、幼いころにシャルロットと面識あり。

性格はちよつと感情的。

少し引き気味だが勝気や強気な面を装ってはいる。

それでも本当は弱虫で意気地なし。

怖いものは怖い、女性でも苦手な人にはあんまり係わりたくないと思ったりもしている。それでも根は強く、本気でやると決めたことには本気で取り組む。

主人公なのでやっぱり鈍感。

使用ISは『一角・零式』（ユニコーン）

ICV：水橋かおり（ラハールの声

イメージイラスト

> i 3 2 0 0 9 — 2 0 5 4 <

名前：織斑一夏

性別：女性

年齢：15歳

性格：基本優しい。原作に似た性格

容姿：千冬の学生時代？

備考：原作主人公にして本作ヒロイン。なんでか女。
前作ではアルの兄的な立場だったが、今回は一転してメインヒロイン。

黒髪で千冬似。細かいところは原作同様。

アルの学園での一番最初の友達で、箒と鈴の幼馴染。

家事全般が普通の女子と比べて異常に高く、そこらへんのお母さんよりもお母さんっぽい。当然料理とマッサージも大得意。

恋愛に関しては意外に積極的。一番最初に行動に出ることが多い。

使用ISはやっぱり白式。第二形態に行く予定は今のところなし。

ICV：豊口めぐみ（はっちゃけた感じ）

機体名：『一角・零式』（名称は一角、もしくはユニコーン）

備考：アルの専用機にして束お手製の力作。

メインカラーは白で展開装甲を持った全身装甲のIS。
待機状態は純白のネックレストップ。

アルの専用機なのだが、稼働時間が半日にも満たない。

今のところはドイツで行ったラウラとの模擬戦と、初期のフォーマライズとフィッティングのみ。

稼働時間が短すぎるため、どんなISかは千冬でも謎。

アルの感情に反応して姿を『デストロイモード』に変えることがあるが、今のところはない。元ネタはユニコーンガンダム。

機体装備：

・ビームマグナム

一角の主力武器。マグナムの名の通り威力は絶大。

最大5基のカートリッジタイプで、使える弾数は予備のカートリッジを含めて最高15発。威力が高すぎて使い勝手が悪い。

・ビームサーベル

バックパックに2基と両腕に1基ずつの計4基。

両腕のグリップは180°展開可能。バックパックの2基は基本的には使えないが、デストロイモード時にだけ展開される。

- ・ハイパーバズーカ

一角唯一の実体弾火器。

時間差で炸裂するタイプの弾と通常の弾を撃つことができる。誘導性はそこまで高くはない。

- ・ビームガトリングガン

4銃身式大型機関砲。

両腕に1挺ずつ、もしくは連結させて片腕に2挺装備可能。

両腕に4挺ずつ装備させることも出来るが、アル本人は片腕でもすごく重い、とのことから1艇を手で持つて使っている。

エネルギー充填式で、コールしてからすぐには使えないという欠点があるが、過剰な威力を誇るビームマグナムよりも多くつかわれる。

- ・シールド

4枚の花弁状のパーツが内蔵されたシールド。

中心部に対ビーム用の『エフィールド』発生装置が取り付けられている。

デストロイモード時は花弁のパーツがX字型に展開され、エフィールド発生装置が露出される。

キャラ紹介（後書き）

誤字脱字、感想あればお願いします。

第01話 泣き虫男性操縦者

『インフィニット・ストラトス』

省略、頭文字をとって『IS』

今、世界はこの『IS』のせいで傾いている。

男女のパワーバランスが崩れ去り、女尊男卑の世の中になっている。

それは何故か。

その理由はISの謎の一つが関係していた。

ISは”女性”にしか動かせない。

このIS、今までの兵器を凌駕する力を持っている。

たった一機で全2341発以上のミサイルの半数を迎撃できたり、
大量に投入された軍事兵器の大半を破壊することが可能。

それを知らしめたのが『白騎士事件』と呼ばれる事件だ。

そんな、強力な力を持つIS操縦者などを育成するのがIS学園だ。
基本、女子しかないが、そんな基本を覆す存在が現れた。

ISを動かせる男。

名前をアルフォンス・ラプラス。長いので愛称はアル。

本人はまだ13歳なのだが、飛び級ができるそうなので、この年で
IS学園に入学することになっている。

そんなアルは、今、窮地に立たされていた。

(こ、これは・・・やばい・・・)

一番前で真ん中の席。

右を見れば女子、左を見れば女子、後ろを振り返れないがたぶん女子。

周りは全員女子。しかも全員年上。

男でISを動かせ、異例でこのIS学園に飛び級で入学したアルは、この圧迫感を感じ、物凄いやばかった。

周りの女子はもの珍しそうにアルを見ている。

当然だろう。アルが男なのだから。しかも年下の。

周りに知っている人もいなければ、親しい人もいない。

このIS学園に入れば、基本は男子との接触がない。皆無と言ってもいい。

だがそこに1人だけ男子が入ってきたのだ。珍しくないわけがない。さらにはISを動かせる。それだけでも十分珍しいだろう。

「ん、ラプラス君っ」

「うえ！？あ、はい！」

突然名前を呼ばれ、アルは大きな声を出しながらガタツと音を立てながら立ってしまった。少しぎこちなく、後ろからくすくすと笑う声が聞こえた。

恥ずかしさと圧迫感のせいでさらにこの空間から脱出しなくなってくる。

「あ、突然大声出してごめんね。でも、今自己紹介中で、『あ』から始まってラプラス君の名前が『ア』で、ラプラス君の番だから、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「え、えっと、そんな謝らないでください。じ、自己紹介しますから、落ち着いて下さい」

「ほ、本当ですか？ほ、本当ですよ？約束ですよ。絶対ですよ！」

あわてていて、忙しそうにしている山田先生をなだめる。

さつきから何度もぺこぺこ年下のアルに頭を下げている光景はさすがにアル本人も見たくない。というかそういうのが苦手だ。

そして今度はがばつと顔をあげてアルの手をとっている。

熱心に言っている辺り、仕事熱心なのだろう。

その心はわかるが、アルにとっては少し自重してほしかった。

そう、再び視線が集まってきているのだから。

（こ、こう言うのは第一印象が大事なんだ。深呼吸して、あくまで普通に）

すーはー、と深呼吸をするアル。

第一印象がダメであればこの学園で最低1年、運が悪ければ3年間環境が悪くなり居場所がなくなるとみた。

後ろに振り向き、視線が集まることを自覚する。

こんな状況で、内気というかなんとというか、意気地無しなアルは早く終わらせたかった。

「ア、アルフォンス・ラプラス、です。フ、フランスから来ました。な、長いんで『アル』って、よ、呼んでください」

がちがちで？み？みだが何とか言えた。

綺麗にお辞儀もし、第一印象としては悪くないはず。

頭をあげれば・・・全員が『他に何かないの?』的な顔で見ている。

状況的にいえば『もつといういろしゃべつてよ』とか『これで終わりじゃないよね?』的な空気が流れ始めていた。

はつきり言つてしまえば、無駄に期待されている。

そんな状況で、次第にアルの目尻には涙が浮かんできた。

本当に小さく、近くの人でもよく見なければわからないものだが、今のアルは確実に、あと一步で泣きだしそうだ。

「・・・い、以上です」

スパアンツッ!!!!

突然思いつきり頭を殴られた。

「あう・・・」

頭を押さえたままその場でうずくまるアル。

威力は申し分ない。というか痛すぎる。

うずくまって涙をこらえるが、さすがに今ので確実にぼろっと涙が出た。

「挨拶もまともにできんのかお前は」

「ち、千冬さ」

スパアンツッ!!!!!!

再び頭に衝撃が。たぶん出席簿で叩いてるんだろう。

「ここでは織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生・・・」

頭を押さえながら席に座る。

涙は、たぶん出てないはず。

泣いてるって言われても、泣いてないって返すつもりだ。

（あー、もうダメ。泣きそう、というか泣いてもいいかな？泣いたら弱虫つてのがばれるけど、いいよね？）

頭の中での自問自答を繰り返すアルだった。

side out

HR、さらに1時間目のISの基礎理論が終わり、休み時間。

案の定、アルの自問自答は答えが出ないで終わった。

頭の痛みはまだ抜けない。

というか、ずっと頭を押さえていたせいでまた殴られたぐらいだ。

（痛いなー、本気で殴ることないのに・・・）

やっぱり頭を押さえているアルは机に突っ伏している。

はつきり言って、IS関連は何も問題はない。

あの大天才、篠ノ之束その人に教えてもらっただから。

休み時間。

それは普通なら心を休め、次の授業に備える時間だ。

だが、今の状況は何とも言えない。

他のクラスからの女子が廊下からアルを見ている。
教室でも同じ。仲のいい数人が集まってアルを見ている。
そんな状況はやはりアルには耐えかねる物だった。

「えっと、あの、ラプラス君・・・でいいんだよね？」

「う・・・？」

頭を押さえていた状態から、声をかけられた。

IS学園に入ってきて、はじめて声をかけてもらえた。
嬉しいと言えばうれしい。嫌ではなかった。

ちよつと変な声を出して反応してしまい、声をかけてくれた女子は、
なんだか少し困惑気味。それでも話そうとしてる。

「私、織斑一夏。えっと、頭大丈夫？」

心配してるつもりなのだろうが、聞き様によつてはバカにされている。

でも今のアルは心配してくれる人。優しい人が成り立っているため
バカにされている、なんて微塵も思っていない。

そしてこの少女　織斑一夏と名乗っていた。

『織斑』の性を持つことから、このクラスの担任である千冬の姉妹
なのだろう。顔を見てみればどことなく似ている。

綺麗な黒髪に、千冬に似た顔。

厳しい姉の千冬とは対照的で、明るくて優しいそう。

「な、泣いてたの・・・？」

恐る恐る聞かれた。

目尻には涙。目は少し充血してて赤い。

頬の辺りはちよつと赤くなっていた。

「な、泣いてないよ？」

意気地なしで弱虫なため、強気を装っている。

だから泣いてる、なんて言ったらますますバカにされるだろう。

一夏も、そこら辺は詮索はしない。

アルのことを考えての行動だろう。

この気遣いはアルにとって物凄くうれしかった。

「ラプラス君、千冬姉がごめんね。というか知り合い？」

「アル」

「え？」

「名前。名字じゃなくて『アル』って名前がある」

最初の自己紹介のときにしつかり言っていた。

名字じゃなく、『アル』と呼んでほしいと。

それを聞いて一夏は笑いながら、アルに手を出した。

アル本人はどうしたんだろうと思っている。

「私も、一夏ね。アルの学園での友達第一号だよ」

第01話 泣き虫男性操縦者（後書き）

次回はセシリアが登場！

弱虫なアル君に突っかかります！

そしてこの小説では、筭が空気と化します。
まあ、出番があるときはしっかりあります。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第02話 友のための怒り

「ちょっと、よろしくて？」

2時間目が終わり、再び休み時間。

隣の席だった一夏と話している途中、突然声をかけられた。

声をかけてきた相手は、綺麗な金髪を持った女子だった。

先生に注意されないことから地毛だろう。そこから見るにアルと同じ外国人だということがわかる。

ロールがかかったその髪は、いかにも高貴なお嬢様。

雰囲気も『まさしく』で、その女子もまたしかりだ。

しかも、ISのせいで女性が優遇されているせいか、上から目線。女性＝偉いの構図を簡単に表してるようにも見える。

「聞いてます？お返事は？」

「え、あ、はい。なんですか？」

消極的、というか引き気味なアルは丁寧口調で聞き返す。

基本、こう言うのは受け身になってしっかり答えれば何もないはずだ。

アルの返事の仕方悪くはないはず。

なのに、相手の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではないのかしら？」

「え……」

アルは、ついでに横で聞いていた一夏もだが、この手の相手は苦手だ。

ISが使えるからIS操縦者は偉い。だから女は偉い。

確かに、ISが使えるのはいい。だがその力を振り回せば暴力となんら変わらないのだから。

「うんと、僕、君のこと知らないから、そんなこと言われても……」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補制にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「うん……」

事実、アルは世界を回ったことがあるが、『オルコット』という名にも『セシリア』という名も、これまで一度も耳にしたことがなかった。

自己紹介でいろいろ言っていたが、アルの頭はその状況から抜け出したいという思いでいっぱいだったから聞いてなかったのだろう。

一夏も名前を聞いて、あー、みたいな顔をしている。

ようやく名前を覚えてくれたことの方が代表候補制ということより印象的だったのだろうか。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じにすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実を少しは理解していただける？」

「そうですか。これはこれは、僕は運が良かったんですね。ラッキーってやつです」

「・・・バカにしていますの？」

アル本人は微塵もバカにしているつもりはない。

セシリアが幸運と言ったので、素直に喜んだだけだ。ちよつと棒読み気味に聞こえるのは気のせいだろう。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入ってこれましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていたから、少しくらいは知的さを感じさせるかと思ってましたが、期待はずれですわね。逆に幼稚なんじゃなくて？」

ぷちっ。

頭の中で何かが切れる音がした。

それは聞いていて怒りがわいてきた一夏でもなければ、他の女子でもない。

アル本人だ。

「ISについて何も知らないくせに」？ バカにするのも大概にしてほしいな。僕は君なんかより幼稚じゃないんだからたくさん知ってるよ。なんなら教えてあげようか？」お嬢さん」

今度は受け流しても何でもない、ただの挑発。

先にバカにしてきたのはセシリアだし、東本人から直々に教えてもらっているアルに知識で勝つのは本当に難しいだろう。だがセシリアが挑発に乗ってこようとした時だった。

キンコーン、カーンコーン

ナイスタイミングでか、チャイムが鳴り響いた。
アル本人はこんな挑発をするんじゃないかと、言った後に後悔していたため、このチャイムが福音に聞こえていた。

「っ……！また来ますわ！逃げないことね！よろしくって!？」

イヤだ、と言いたかったが言う勇氣もないのでうなずく。
かつかつと足音を立ててセシリアは戻って行った。

side out

「これより、再来週行われるクラス対抗戦代表者を決める。クラス代表は、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など、まあ、クラス長と考えてもらって構わない。自薦他薦は問わん。誰かいなか」

3時間目の授業での千冬の第一声。
その言葉を聞いて一瞬でアルは悟った。

絶対面倒だ、と。

そしてその予想は当たった。
それはなぜか。それは

「はいっ、アル君を推薦します!」

「私もそれがいいと思います！」

「え・・・？」

「では候補者はアルフォンス・・・他にはいないか？いなければ無投票当選だぞ」

「え、いや、僕はそんなの」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権はない。選ばれた以上覚悟してやれ」

反論は聞かない。聞いてくれない。

1、2時間目に続き3時間目でも泣きそうだ。

だが、泣いたら泣いたでまたセシリアにバカにされるだろう。それだけは避けたかった。

聞いてもらえないだろうがもう一度反論しようとした時だった。甲高い声が、アルの言葉を遮る。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

バンツと机をたたきながらセシリアが立ち上がった。

全員が振り向き、視線はセシリアに集中した。

そしてさらにセシリアは続ける。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくし

にとっては耐えがたい苦痛で

」

半分以上アルをバカにする内容でもあった。

それを聞いて、さらに怒りをあらわにする人物が一名。

先ほどのセシリアと同様に、という訳ではないが立ち上がって言い放った。

「あんた、さっきの休み時間といい、今の発言といい、アルのことバカにしすぎじゃないの！？それに、そんなこと言っただったら自薦して自分からクラス代表になればいいじゃない！」

その人物とは一夏だった。

アルをバカにする言葉にもう堪忍袋の尾が切れたのだろう。

友達がバカにされたのは耐えきれないと言った形相でセシリアに言葉をつつけている。

教卓の前では千冬が頭を抱えていた。

このバカが・・・、と言いたげでため息をついている。

「い、一夏！ぼ、僕のことはいいから、ね？」

「よくないよ！アル、自分のことバカにされるんだよ？私は黙ってられないね」

「ええ！？いや、でも」

「それに、日本のこともバカにするようなこと言ってたけど、世界一おいしくもない料理で何年覇者なんだか」

「あ」

言ってしまった。言っではならない禁句を言ってしまった。
しかも何気なくさらっと。普通に。

アルは恐る恐るセシリアの方を向くと、顔を真っ赤にしたセシリアが完璧に怒りをあらわにしている。完全にやってしまった。一夏がやってしまったのだ。

「決闘ですわ!」

「受けて立とうじゃない!」

「わざと負けたりしたら小間使い、いえ、奴隷にしますわよ」

「あいにくと、私はわざと負けるほど優しくないの」

勝手に話が進んでる。

アルの願いはなんでもいいから誰か助けて、だった。

だがそんな願いもむなしくこの2人の話を聞きいれる千冬。
もうアルに逃げ場はなかった。

「決まったようだな。勝負は一週間後の月曜の放課後。第3アリーナで行う。それまで織斑とオルコット、アルフォンスはそれぞれ用意をするように」

「え?僕も?」

「当然だ。他薦されたものに拒否権はないと言ったはずだろう?」

一瞬でアルの望みは崩された。

第02話 友のための怒り（後書き）

次回は筭が登場？（予定はたぶんだけどあり
一日目が終わってアルのルームメイトとは？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第03話 ルームメイト（前書き）

だ、ダメだ・・・。

箒を出そうとするのに、なかなか出せない。

これは、マジで空気になるかもしれない・・・。

今回はやっぱり箒は出ません。

第03話 ルームメイト

一日目の授業がすべて終わり、今は放課後。

一夏とセシリアの言い争いに巻き込まれ、少し面倒なことながらアルもセシリアと戦うことに。

そして今は休み時間と同じ状況。

他のクラス、さらには他の学年からの女子が来てさあ大変。

昔日本ではやったウーパールーパー状況だ。

学食に行くにしてもぞろぞろと付いてくる。

アルの大食漢ぶりをみて引いた者もいれば面白がる者もいた。

「あ、ラプラス君、ちょうどいいところに。寮の部屋が決まりましたよ」

「へ？」

一週間だけ学園外からの通学を言われていたのだが、何かの聞き間違いだっただろうか。普通に疑問符を頭に浮かべる。

そんな顔を見て、ちよつとだけくすくすと笑う山田先生は、アルに部屋の番号が書かれた紙とその部屋のキーを渡す。

いまだにアルの顔は疑問な顔だった。

「あ、荷物」

「それならここにあるぞ」

突然現れた千冬に少し大きめのバッグを渡された。

というかいつからいたのだろう。瞬間移動だと思ってしまっ
渡されたバッグにどこか見覚えがあったアルは、すぐさま中身を確
認した。

着替え、愛用のゴム、IS調製用どこでもデイスプレー（束オリジ
ナル）、純白のネックレストップ、他いろいろ。

見覚えがあるものがどっさり。
しかもめちゃくちゃお気に入りのもだったり、愛用してるものと
かだった。

「とある人物からの贈り物だ。感謝しておくように」

「はい。ありがとうございます」

そのバッグを背負い、すぐさま自分の部屋へと向かったアルだった。

s i d e o u t

しばらくして自室に到着。

部屋番号は1025室。確認、大丈夫、しっかりと合っている。

早速といわんばかりにドアノブに手をかける。
鍵はかかっていないようだ。

そのまま中に入り、という部屋を確認した。

「おお」

「あ、ルームメイトの人？」

「っ！？」

突然声が聞こえてきた。

ドア越しで声に曇りがあるが、確実に女子だ。しかも、この状況は激しくやばい。

シャワー室があるから、たぶん相手はバスタオル越し間違いなしだ。

「ごめんね、先シャワー使っちゃって。私、織斑」

「い、一夏？」

「ア、アル？」

シャワー室から出てきたのは、今日学園での初めての友達、一夏だった。

その姿は、今しがたシャワーを使っていたためバスタオル一枚。本当にいろんな意味でぎりぎりで、見えるか見えないかの瀬戸際。まさしく絶対領域というやつだ。

露出した太ももや、くびれた腰つき。

片手でバスタオルを押さえている胸など、本当にぎりぎりだ。ぶっちゃけ、13歳のアルでも男なので刺激が強すぎた。

「ご、ごめん！み、みるつもりじゃ・・・」

「え？あ！ダ、ダメだよ！？め、目えつぶつてて！！」

顔を赤くしながら両手で目を隠し、顔を横にそらすアルに対して、

一夏も顔を赤くする。当然アルは反応と対応に困ったのだが、急いで頭をフル回転させて今の状況に至る。はつきり言ってみえたら死亡フラグだろう。

「な、なんでアルがここに？」

「ぼ、僕、この部屋って言われたから」

目を隠し、バッグで影を作ってさらにそこに隠れているアルは一夏の質問に答える。少しばかり静かなため、服を着るときにするこすれる音が聞こえて一層アルの心臓に悪かった。

「も、もういいよ」

「う、うん」

影から出てくるアルの目には着替えた一夏がいた。

一夏のかっこうは非常にラフなもの。ホットパンツに半袖。

まあ、アルは女子の寝間着など、かれこれ数回、しかも子供ものしか見たことがない（幼少時代のフランスで）

どちらにしろ、気が緩んだので何よりだった。

「あ、シャワー使ってもいい？」

「え、あ、うん。どうぞ」

一日の疲れをとりあえず落としたい。

その思いから何事もなく、普通にシャワーを浴びたかった。

アルはちよつとふらふらとした足乗りで脱衣所へ入って行った。

（１０分後）

ゴムでまとめていた後ろ髪をほどき、タオルでワシャワシャと頭を搔きながら寝間着姿に着替えたアルが脱衣所から出てきた。

綺麗な琥珀と言ってもいいオレンジ色の髪の毛は、部屋の光でも反射してさらに綺麗に見える。女の子にも見えなくてもない容姿は一夏の心をすごい勢いでくすぐった。

「ア、アル。髪、整えてあげよっか？」

「え？いいの？」

「うん」

櫛を持って笑顔な一夏。

優しいような笑顔に、アルは頼むのだった。

「うわあ、すごいね。女の子みたいにさらさら」

「え、そう？」

「うん。たぶんお母さん譲りなんだね。すっごく可愛いと思うよ」

「そうかな？えへへ」

髪の毛を触りながら感想を言っていく一夏の言葉に、アルは照れてきた。可愛いと言われ、嬉しくなって顔が少しニコツとしてくる。

脱衣所についていた鏡でその顔を見ていた一夏も嬉しそうだ。

終わった後、ベッドの上で胡坐をかいているアルは珍しく髪の毛を

ちよつとだが弄っていた。なんだかいつもと違う感じで嬉しいのだろつ。

「おお、すごい。アホ毛ができた」

「あ、あれ？」

髪の毛のてっぺん辺りにぴよこつと飛び出たアホ毛。

今までになかったため、ちよつとした違和感。

失敗したかな、と思う一夏だったが、アルはどうしてかぴよこぴよこと動かすことができ、なんだか楽しそうだった。

side out

翌日の朝。

一夏の朝はいつも早めだ。

毎朝6時前に起きる。

そして、いつもなら弁当を作ったりするのだが、今は寮で学食があるためその必要はない。だが、それでも早く起きてしまったので、落ち着かなかった。

顔を洗い、歯を磨く。

髪の毛を整え、制服に着替えても今の時間は6時30分ぐらいだ。

「はあ、何もすることないなあ。どうしよ」

そんな独り言をつぶやいている時だった。

突然アルが上半身だけをむくりとおこす。
だがなんだか目がまださめてなさそうだ。

「ふぁ〜〜、おはよ・・・」

「うん、おはよ」

目をごしごしこするしぐさが何だか可愛い。

意外に、こう言うのはいろんな人の心を打ちぬけるものだ。

そして一夏もまた、心を打ち抜かれた。

だが平常心は保っていられたので変な行動は起こしたりしないから
安心していい。

「ん〜〜！！よし、目が覚めた」

今度は伸びるしぐさ。

これもまた、一夏の心を打ち抜いたのだった。

第03話 ルームメイト（後書き）

平常心は保ってられる。

たぶん大丈夫だ。メインヒロインが暴走しちゃだめだもんね！w

次回はいろいろすっ飛ばして早速バトルでもいいかな？

でもその前に何か入れないければ。それに箒も出さないといけないし。

ん？待てよ。あえて箒は出さないでいいんじゃないだろうか。

あ、そしたら福音戦の前のあれが面倒なことに・・・。

とりあえず、誤字脱字、感想あればお願いします。

第04話 対抗意識（前書き）

うーん、今回も箒の出番なし。

出そうだけど出ない。しょうがない？

箒ファンみなさん、すいません。

「5、5時間・・・です」

沈黙。アルの答えに頭を抱える千冬。

しばらくしてからアルの頭をガシツと掴む。

「？」

「まさか、ラウラとの模擬戦の後から一度も乗ってないとかいうんじゃないだろうな？」

「・・・乗ってませ

いだだだだだ！！！！！」

突然のアイアンクロー。

あまりの激痛で必死に頭から千冬の腕を引き剥がそうとするが、無駄に食い込んでいるせいでとれない。

というか、アルの非力な腕力では到底引き剥がせないだろうが。

1分から2、3分ぐらいしてから、アルはようやく恐怖のアイアンクローから解放された。まさかISに乗ってないだけでこんなことになるとは思ってもいないだろう。

掴まれていた頭を両腕で押さえ、半分泣き目だ。

「それと織斑、お前のISは訓練機になる。構わないな？」

「え、あ、はい」

急に話の内容を切り替えられた。

専用機相手に訓練機で挑むなんて負けに行くようなもの、と思う生徒がいるが、一夏はまったく気にしていなかった。

セシリアの方をばれないようにチラッとみると、自信にあふれた顔で、胸を張っている。どこからその自信がわいてくるのだろうか。

「では、この授業はここで終了する」

side out

「専用機を持っているわたくしに訓練機で挑むなど。まあ、専用機だろうと勝負は見えてますけど」

早速席にやってきたセシリア。

お気に入りのポーズ（手を腰に当てている）でまたもや胸を張っている。

そしてやっぱり上から視線。

専用機持ちらしいので負けることは考えてないようだ。

「あっそう。でも専用機持ちが訓練機に、しかもそこまでISに乗りなれてるわけでもないこの私に負けたらどうする？結構面白いと思うんだけど」

「威勢がいいですね。それでもわたくしの勝利はゆるぎないですわ」

なんだかこの2人の仲は以上に悪い。

まあ、敵対しているので当然と言えば当然だが、近くに来るたびにいがみ合うのはやめてほしい。アルとしては迷惑際ないものだ。

「そして、あなたも。さすがに専用機ではないとフェアじゃありませんものね」

「・・・」

「聞いてますの!？」

「・・・」

アルに話を振ったセシリア。

だが一向に返事がない。なんでか出されているディスプレイで顔が見えないため、どうすればいいかちょっと困る。

「ん？何か言った？」

そして最終的にはこれである。

頭に装着していた束特製でオリジナルのES調製用どこでもディスプレイを使用していて、集中していたのでセシリアの言葉は耳に入ってこなかったようだ。

この行動でさらにセシリアの神経を逆なでする。

怒りをあらわにするが、アルはどういうことかわかっていない。

頭の上に疑問符がいくつも浮かんでいる。

「あ、そろそろお昼だ。一夏、学食行こ」

「ん？ああ、そだね。じゃ、そういうことで」

ふと時計が目に入り、セシリアを綺麗にスルーして教室を出ていく。その場にはひとり残ったセシリアと静寂だけが残されていた。

side out

「ねえ、君って噂の子でしょ？」

学食につき、即座に超特盛りでラーメンを頼んでから一夏と席に着いた。

早速食べ始めようとした時だ。突然見知らぬ女子に声をかけられた。

やや外側にはねた癖毛が特徴的な女子。

リボンの色が一夏と違うため先輩だ。

1年は青、2年は黄色、3年は赤で、その先輩は赤だから3年だ。

「そうなんですか？」

返事をする、自然な動きで隣に座ってくる。

馴れ馴れしいというか、少しばかり（？）遠慮がない。

アルはこう言うのが苦手だから受け流す気満々だ。

「代表候補制の子と勝負するって聞いたんだけど、ホント？」

「えっと、はい。そうですね」

すでにアル（と一夏）がセシリアと戦うのは噂らしい。

さすがは女子。情報の周りにはやはり男よりも数倍だ。

しかも3年までとはどのくらい速いのか気になってしまっ。

「でも君、素人だよね？ISの稼働時間はどのくらい？」

「えっと、5時間と27分49秒弱です」

「こ、細かいね・・・じゃなくて、それじゃ無理だよISって稼働時間がものを言うの。その相手が代表候補制なら、軽く300時間はやってるわよ」

アルとしては何時間やればすごいのかわからない。

だが確実にわかるのはこのままじゃセシリアに負けるということだけだ。

以前ドイツで一度だけ、模擬戦をしたことがあるがそれもボロ負けだった。『AIC』を使われ身動きができず、単調な動きは簡単に読まれた。

軍人に素人が勝てるほど世界は甘くないということだ。

「でさ、私が教えてあげよっか？ISについて」

食べる手を止めて、悩む。

こういう場合は非常に困る。

確かに教えてもらえるのは嬉しい。

嬉しいが、アルはこう言うのにまったくと言っていいほど慣れてない。

むしろこう言う機会に慣れておいた方がいいのだが、極力そういうのは面倒なのでやりたくなかった。

悩んだ結果、返事をしようとした時だ。
声を出す前に先に喋られてしまった。

「私が教えるんで大丈夫です」

一夏だ。先ほどから無言だったがやっと喋ってくれた。だがそんな言葉に一步も引かない先輩。(名前不明)というかアルは、一夏からは何も聞いていないよ？みたいな顔をしている。

「あなたも1年でしょ？私の方がうまく教えられると思うんだけどなあ」

「私、織斑先生の妹ですから」

「へえ、織斑先生の妹さん つて、ええ！？」

ようやくたじろいだ先輩。

まあ、誰でもあの千冬の妹と聞けば驚くだろう。

その先輩も一夏の顔をみて「そういえば似てる・・・」と言葉を漏らしているぐらいだ。千冬と同じ顔はいろんな意味で最強の武器かもしれない。

「なので結構です」

「そ、そう。なら仕方ないわね・・・」

ちよつと残念がりながら戻っていく親切だった先輩。アルはどうしたらいいかまだ困惑気味だ。

「一夏」

「ごめん。でもなんかノリって言うか、なんていうか。こう言うの

ってなんか対抗意識出ちゃうんだよね」

「ありがとう」

「え？」

つい対抗意識が出てしまった様だ。

それで千冬の（名字だが）名前を出すのはどうかと思う。
だが逆にアルは嬉しかったようだ。

小さく、ありがとう、と言ってそそくさとまた食べ始めた。
その言葉は一夏が聞きとれたかどうかかわからない。

「おかわり！」

「まだ食べるんだ・・・」

第04話 対抗意識（後書き）

今回はセシリアとの対決！

例によって例がごとく一夏の戦闘をカットするかどうか迷ってます。原作の一夏と戦い方は同じっちゃ同じだけど、違うと言えば違うかなあ。

アル君の場合、早速デストロイモードを使うか迷ってます。

デストロイにする場合、感情を高ぶらせないと（わかりやすくするなら）行けないですからね。

使ったら使ったで、一歩間違えばブルー・ティアーズの損傷が小から中、もしくは大破になるかも？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第05話 クラス代表決定戦 前編（前書き）

今回はクラス代表決定戦。

前編なので今回はセシリアvs一夏です。

ちよつと省いてる部分がありますが、問題はないかと。

第05話 クラス代表決定戦 前編

翌週月曜日。

セシリアとの対決当日。

「ねえ、一夏」

「・・・な、何？」

「僕、一夏に教えてもらうはずだったよね？」

「う、うん」

当日までの一週間。

一夏が3年生の先輩に対抗意識を出したため、結局は一夏自身がアルにESについて教えることになった。

だが少しばかり問題が解決されていない。

「僕、逆に教えてた気がするんだけど、気のせいじゃないよね？」

「・・・」

「あ、目え逸らした」

アルの頭脳は劣化版束のようなもの。

ぶつちやけ、知識で勝つのは無理に等しい。

最終的には何も訓練などの体力付けなどはせず、アルがみっちり細かいところまで解説、説明するに至る。

「確かに、一夏より僕の方が頭がいいのはわかるよ。飛び級だし。でも、一夏が教えてくれるって言うてくれたから、僕期待してたのに」

「しょ、しょうがないよ。ほ、ほら、知識だけでも、備えあれば憂いなしって言うじゃん」

「それでも僕には何も教えてくれなかったよね」

「・・・」

「あ、また目え逸らした」

結論から言つと、一夏は何もしていない。

アルにはわかりまかせつきりで、教えることができなかった。

アルは一夏は運動ができそうだが、訓練機でも使つてISの訓練をするんじゃないのかと思つていたのに、期待を大いに裏切られた。本当にセシリアに勝てるのだろうか。

「あ、そうだ。一夏、はい」

「え？何これ？」

今さっき思い出したように、ポケットから何かをとりだす。

先に一夏がセシリアと戦う気だったので、すでにISスーツを着た一夏に渡すが、何が何だかわかっていない。

「え、えっと、その、い、一夏の専用機・・・（ぼそ」

「え？今、なんて？」

「一夏の専用機！束姉から送られてきたの！」

「ええ！？」

怒られると思い、小さくぼそつと発言。

聞こえなかったか、聞き直すが聞き方がいけなかったのだろう。

少しむすつとしたアルは大きな声で返し、それと同じぐらいの声で一夏も驚いた。

アルが渡したのは白い腕輪。

真つ白で、それ以外の何物でもない。

名を『白式』一夏のために束が作った専用機だ。

「ということですけど、どうすれば？」

『なんでもいい、早く準備をしる。アリーナを使用できる時間は限られているんだ。フォーマライズとフィッティングは実戦でやれ』

「え？マジですか？」

「機体名は『白式』^{ごまへつ機}。僕も一夏の戦闘を見たいけど、一角の調整があるし、見たら対策取れちゃうから見ないよ。でも、応援してるから、頑張ってね」

近くにより、白式を付けた手に手をかける。

その瞬間、ちよつとだけドキツとしたのは一夏だけの秘密だ。

アルの見上げる顔、上目使いが可愛いと思ったのがこれが初めてだろつ。

「うう・・・（ちらっ）・・・ああ、もう！白式！！」

一瞬千冬を見てから何かを諦め、一夏は白式の待機状態を付けた右手を掲げながら、高らかに叫んだ。そこにあった一夏の展開した専用機はまさしく白そのものだった。

side out

「あら、逃げずに来ましたのね。専用機を持っていたのですか」

ふふんつと鼻を鳴らし、お気に入りのポーズをとっている。

だが一夏はそんなのはお構いなしで関心などなしだ。

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』

自分の背丈よりも大きな銃『スターライトmk？』と、特徴的なフィン・アーマーが背中に4枚。例えるならどこかの国の王国騎士だ。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたく、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

目を笑みに細めるセシリア。

余裕なのか、砲口は下がったままだ。

警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行
セーフティロックの解除を確認

ISが告げる情報を見てから、再度セシリアを見る。
左目だけを射撃モードに出来る辺りを見るとさすが代表候補生だと思える。

「そういうのって、チャンスとは言わないと思うんだけど。例えばチャンスだとしてももらない」

「そう？残念ですわ。それなら」

警告

敵IS射撃体勢に移行

「お別れですわね！」

「っ!？」

キュインッッ!!

耳をつんざく音が聞こえ、それと同時に閃光が一夏の体を打ち抜く。

「いつつ・・・こりゃ、久しぶりに派手な運動になりそうだなあ」

白式の反応についていけない一夏。

弾雨のごとく攻撃がどんどん降り注ぐ。

的確に狙ってくるそれは、慣れていない一夏ではよけることはおろか、凌ぐことすら難しい。どんどん削られていくシールドエネルギーに反応して、白式からのアラートが鳴り響き、うるさくて仕方な

い。

「装備は・・・」

接近ブレード『名称未設定』

一瞥だけ映し出される。

だが素手で戦うよりは武器があつた方がいい。

「これしかないなら、これで行ってやるわよ！」

加速しながら、片手に『刀』を持ち、セシリアへ突撃。
だが届かない。近づいて切らせてくれない。

何度繰り返しでも弾幕はやむことはなく、一夏を近づかせることを拒んだ。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でここまで耐えたのはあなたが初めてですわ」

「そりゃどうも」

ここまでで実に27分弱。

一夏のシールドエネルギーは100を切っていた。

「では、ファイナレとまいりましょう！」

笑みとともに右手をかざす。

命令を受けたビットが全機、多角的な直線機動で接近してくる。

そんなのあり!?!と言わんばかりに驚いている一夏をお構いなしで、

ビットは攻撃を開始する。上下に回ったビットの先端が発光、レーザーを放つ。

それらすべてをかるうじて防御と回避に成功した。だがそのすきを通き、セシリアがライフルで狙ってくる。

「左足、いただきますわ！」

とどめの一撃。

確実に喰らえばエネルギーは0になり負けだ。

だが、はいそうですかと終われる一夏じゃない。

「はああああ！！！！」

無理やりな加速でいつきに間合いを詰める。

セシリアめがけて思いつき刀を振り抜く。

当然のごとく回避されてたが、そのおかげでとどめの一撃はこなかった。

すぐさま体制を立て直してから再び距離をとるセシリア。

今度は左手をかざし、それまで周囲で待機していたビットは一夏へ向かって飛んでいく。

（ん？ああ、そういうこと。オッケー、もうわかった）

穿たれるレーザーをかわし、その内のビット1機に向かって一閃。さらに加速してもう1機にも一撃。

重い金属を切った感触が手に伝わり、それらは次の瞬間爆発した。

「なっ！？」

「わかった。あんたはこの兵器を使うとき、それ以外の行動ができない。しかも毎回命令を送らないといけないみたいね」

「っ・・・」

無言は肯定の証。凶星の様だ。

セシリアは一夏の反応が一番遠い角度を毎回狙っている。ならば簡単だ。誘導できるのだから、誘導して待ち伏せしてやればよい。

それでもビットで攻撃してくるセシリアに対し、一夏はいとも簡単に、素早く残りの2機をたたき切って破壊した。

「距離を詰めれば!!」

「かかりましたわ」

「っ!?!」

「4機だけではありませんわよ!」

突如、スカート状のアーマーの突起が外れ、動いた。

これは回避ができない。しかもレーザーじゃない。誘導弾、すなわちミサイルだ。

ドガアアアアアッッッ!!!!!!

赤を超えて白。

その爆発と光に一夏は飲まれた。

第05話 クラス代表決定戦 前編（後書き）

今回は一夏がファーストシフトを終わらせたあたりから。
そしてその後にセシリアvsアル君です。

デストロイモードを使うかはまだ迷ってます。

まあ、使うとなったあかつきにはセシリアをアル君（一角）がフル
ボッコにしますよw

誤字脱字、感想あればお願いします。

第06話 クラス代表決定戦 中編（前書き）

ついに10000pv突破！

これからもがんばっていききたいと思います！

第06話 クラス代表決定戦 中編

フォーマットとフィッティング終了しました
確認ボタンを押してください

「????」

爆発が起きたと思い、一夏は負けを覚悟していた。
なのにまだ負けていない。エネルギーが残っている。

目の前に映し出されたディスプレイには『確認』と書かれたボタンがある。それを押すと、膨大なデータが現れ、整理され始めた。
そして次の瞬間、白式に変化が現れた。

一夏の全身を包んでいるISが光の粒子に弾けて消え、そして再び形をなした。

新しく形成された装甲はまだぼんやりと光を放っている。
先ほどまでの実体ダメージは消え、洗練された形に変化していた。

「ま、まさか、ファーストシフト！？今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの！？」

「んー、そうみたい。あ、そういえばフォーマットとフィッティングは実戦でやれて言われてたっけ」

ようやく一夏の専用機になった白式は滑らかな曲線とシャープなラインが入り、どこか中世の鎧のようなデザインへと変わっている。
その手に握る『刀』にも名が付き、接近特化ブレード『雪片式型』へ変化していた。

その名は姉の千冬が使っていた刀の名。

姉妹で同じ名の武器を持ち、姿も似ている。

ISの形は違えど、現役時代の映し身の様だ。

「私は世界で最高の姉さんを持った妹ね。これでようやく、私も家族を、誰かを守る」

「・・・は？あなた、何を言って」

「まずは千冬姉の名前を守る！妹が出来じゃ、格好つかないもんね」

元日本代表の妹。

それが不出来じゃ、本当に格好がつかない。

大好きな千冬が格好つかないなんて、冗談じゃなく笑えない。むしろ笑われる。

「さつきから独り言を。もう、面倒ですわ！」

弾頭を装填したビットが2機、セシリアの命令で飛んでいく。

また多角的な直線機動で、射撃型ビットよりも速いが一夏には見えた。

それに、手に握っている雪片の使い方も、なんとなくがわかってる。

ブレードが開き、エネルギーの刃が現れる。

そしてそのまま横に一閃。切り捨てられたビットはそのまま爆ぜた。

「はああああっ！！！！」

いける！

そう確信し、雪片をさらに強く握りこむ。

エネルギーの密度が増していくのがわかる。

セシリアの懷に飛び込み、一気に切りかかるうとした時だ。

『試合終了。勝者 セシリア・オルコット』

「「え？」」

side out

「よくもまあ、持ち上げては裏切ってくれたな。この大馬鹿者が」

結果は一夏の負け。

原因は白式の単一仕様能力『零落白夜』のせいだ。

バリア無効化攻撃と呼ばれ、シールドエネルギーを消費して攻撃に転じる、まさしくもろ刃の剣。

使いどころは悪いわけではなかったのだが、序盤でエネルギーを削られすぎたのが原因でもあるのかもしれない。

どちらにせよ一夏の負けは決定なのだ。

「アルフォンス、準備はできたか？」

「も、もう少し。後ちょっとだけ」

「早くしろ。オルコットはすでに再出撃したぞ」

「で、出来ました！え、えっと、一角！」

おろおろしながらネックレストップを握りながら呼ぶ。

展開したISは一夏と同様に白。

ヘッドギアに一本角がついた機体『一角・零式』

白式よりも明るく、バックパック意外が純白白亜で全身装甲。

右手には威力絶大のビームマグナム。左手にはシールドを装備し、今のところはセシリアのブルー・ティアーズ同様中距離射撃型に見える。

「一夏の戦闘は見てないけど、結果だけは聞いたから。僕が戻ってきたら2人で反省会しよ」

「うえ？ああ、うん」

「じゃ、行つてきます」

ピットから一夏同様に出ていくアル。

空にはすでに、先ほど負けそうになって不機嫌になっているセシリアがいた。

だがそれでもアルは年下だから余裕そうにしている。
どうせ男なんて弱い、と思っているんだろう。

「あなたにも、チャンスをおげますわ」

「（Eパックの残数確認OK。15発ちゃんとある）」

「・・・聞いてますの!？」

「え?なに？」

ぷっちんっ。

試合がすでに始まっていたため、セシリアがいきなり攻撃を仕掛けてくる。

ビックリしたアルは、まずよけることをせずにシールドで受け止めた。

中心部に内蔵されている『エフィールド発生装置』が機能し、レーザーはアルには届くことはなかった。

「っ!？」

「ビ、ビックリしたあ!ふ、不意打ちはんたい!!」

「あなた!わたくしをバカにするのも大概にしないと本当に怒りますわよ!」

「バカにした覚えもないし、もう怒ってるじゃん・・・」

セシリアはビシッとアルを指さしながら怒りをあらわにしている。怒るといいながらもうすでに怒っている上に、アル本人はバカにしたつもりはない。ただ聞いてなかったりしているだけだ。

だがそんなのお構いなしでセシリアは攻撃を再開してくる。

一夏の時と同様に弾雨のごとく的確に狙いを定めてアルを狙い撃ちにしているが、全部ガードされ、中々エネルギーを削れないでいた。

「とりあえず、下手な鉄砲数うちや当たるで行ってみようか」

ビームマグナムを構え、何の躊躇もなくトリガーを引いた。
セシリアの『スターライトmk?』とは違う音を出しながらカート
リッジを一つはきだした。

ビームはセシリアを掠めた。

千冬や山田先生は、悪くはないと思っているが、驚くことが一つあった。

「な、掠めただけで4割も削られた!？」

驚異的なビームマグナムの威力は計り知れない。

掠めただけで4割も削れるのなら直撃なら一発で終わりだ。

撃ったアルも驚いている。

ドイツでの模擬戦のときは使う前にたたき落とされたのだから。
威力の強さと使い勝手を覚えるが、今まともに使えるのはこれだけ。
防御をしながら撃つても当たらなければ意味がない。
それを確信し、移動しながら狙い撃つ戦法をとった。

(あ、これ・・・知ってる? いや、覚えてる)

攻撃を避けるため、無意識にとった動きは知っていた。

否、体が覚えていた。幼いころの記憶が同時によみがえってくる。

兄と姉、自分を合わせた3人と遊んでいる時に、よく兄から教えてもらっていた。どうして教えてくれたかわからなかったが、祖尾の動きは何度もやったから体に染みついた。

頭が覚えていなくとも、体が覚えている。
セシリアの攻撃はいとも簡単によけられる。

「これなら・・・こんな弱い僕でも、誰かを守れる！」

どこからわくのかわからない、強い力。

その力を、意思を宿したアルの瞳はまっすぐだ。
つい先週みたおどとした姿が想像できない。

「あなたも独り言ですか！」

一瞬のすきを突き、ライフルでアルを狙い撃ちにする。
見事直撃し、大幅にエネルギーを削りながらアルを地面にたたき落とした。

さらに追い打ちといわんばかりにビットを4機飛ばす。
体制を立て直しているアルにこれは避けられない。
そして何もできないままレーザーが放たれた時だ。

「!？」

放たれたレーザーはすべて弧を描き、アルの周りを沿るように曲げられた。

それはアルが何かしたからじゃない。”一角が”何かしたのだ。

赤い光がアルを、一角を包む。

白い展開はところどころが割れ、内側の装甲をむき出しにする。
脚から腕、胴、バックアップ、そしてヘッドギア。

一角の姿が変形、いや変身した。

一回り大きくなり、姿がまるで違う。

開いた装甲の内側の装甲は赤く発光し、ヘッドギアの一本角は二つに割れた。

背中のバックパックも開き、2つのバーニアが4つに、さらにビームサーベルが2基展開される。

「・・・」

急に黙り込んだアルは、シールドとマグナムを投げ捨てる。

もはや生身で、当てればすぐ終わりなのにセシリアは何もできない。アルはゆっくりと右手を背中のサーベルに手を伸ばし、展開させる。そして一瞬だけ構え、加速しながらセシリアに突撃した。

第06話 クラス代表決定戦 中編（後書き）

はい、次回はセシリアフルボッコのターンです（笑）

ちなみに、アル君の家族。前作は兄だけだったんですけど姉を追加しました。

後の話（オリジナル展開）にかかわって来ます。

まあ、アルのISがユニコーンと言ったら、お姉ちゃんのISはもうわかりますよね？緑色のあれですよ？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第07話 クラス代表決定戦 後篇（前書き）

今回でクラス代表決定戦は終了です。

いやゝ、なんか地味に長かった。

初戦闘でデストロイ（意識なし）はやっぱ良いですね。
書いてて楽しかったです。

第07話 クラス代表決定戦 後篇

「ラプラス君すごいですね。本当にISの稼働時間が5時間半ですか？」

戦闘映像を見る山田先生の感想。

アルの動きは確実に稼働時間が5時間で習得できるものではなかった。

射撃は初心者だというのはわかる。

だがあの動きは千冬でも驚いていた。

「どうした、一夏」

「ああ、千冬姉。一角の装甲見てみてよ。赤いラインが入ってない？」

一夏に言われ、一角の装甲に注目する千冬。

確かに言われてみれば、薄くだが赤いラインが入っている。

何故だか疑問に思うが、わからない。

「あ！」

そんなことを考えていると、アルはいつの間にかセシリアと距離を離れて地面にいた。すぐに直撃したんだとわかる。

体制を立て直している時、ビットが4機周りに着き、一斉掃射された。その時だ。

「「「！？」」」

ビームがすべてアルの周りを沿うように弧を描き、曲がる。
それだけではない。

赤い光が一角を包み、先ほど入っていた赤いラインが開いた。
脚、腕、胴、バックパック、ヘッドギア、すべてが開いて行く。
内側のむき出しになった装甲は赤く発光し、赤いラインはそれが原因だと分かった。

姿かたち、すべてが変わり変身した一角。
さながらファーストシフトが終了したように思えるが、違う。

「な、なに、これ・・・？」

「IS・・・なのか？」

一夏も千冬も困惑している。

ISなのかわからないでいるが、これは間違いなくあの大天才篠ノ之束が作ったISだ。

そんなことを考えている一夏たちには構わず、アルはその場でシールドとマグナムを投げ捨てて背中サーベルを抜いた。

「アルフォンス、お前は本当に何者なんだ？」

side out

驚異的な加速性能を引き出し、一気にセシリアまで距離を詰める。

近づかせないよう、弾幕を張ろうとビットが目の前に現れるが、横に一闪。一度に2機も真つ二つ、しかも縦に斬った。

距離を縮めてきた所を、一夏と同じように今度は大量のミサイルで落とそうとする。だがその考えが甘かった。

大量のミサイルの内1つを切り裂き、爆発させる。

そしてその爆発に連鎖し、他のミサイルはすべて意味をなさなくなつた。

「・・・」

「っ!？」

無言のアルの瞳は、セシリアをにらむ。

その眼は先ほどの力強いものではなく、冷徹で残酷な、敵を倒すためだけの冷たい軍人の様な眼だった。

一気に距離を詰められ、右手を振りかぶるアル。

危険を察知したセシリアはすぐさま近接用の武器『インターセプター』をコールし、ギリギリのところでサーベルを受け止めた。

バチイツッ!!

切りつけようとしては離れ、また切りつける。

ビームサーベルを何度も受け止め過ぎたインターセプターの実体をもった刃はもうすでにボロボロだ。

「ハア、ハア・・・な、なんですの。あの加速は・・・!!」

肩で息をし、荒い呼吸になるセシリア。

右手で逆手持ちにしたボロボロのインターセプターは、後一撃耐えられたらいい方だろう。

そして再び加速して接近してくるアル。

残り2機のビットとミサイルビットを飛ばし、接近を阻むが、レーザーを撃つ前に両機とも切り落とさ、ミサイルビットも破壊された。減速せず、勢いに任せたままアルはサーベルをふるう。

耐えられるかどうかもわからないインターセプターで受け止めようと構えた時だった。

突然アルの姿が消えた。否、見失うほど速い加速をした。後ろに姿をとらえたが、一気に切りぬきをされる。

だが何の変化もない。変化があるとしたら少しエネルギーを削られたぐらいだ。だが次の瞬間、嫌な音が連続して聞こえた。

バチバチツ・・・

・・・ガシャンツツ・・・

「?」

右手から音が聞こえると思い、ふと目をやる。

そこには手首から先がないブルー・ティアーズの左手があった。

そして自分の真下にはインターセプターを持った右手首。

アルは何もしなかったんじゃない。右手首を邪魔なインターセプターごと切り落としたのだ。

「な!？」

基本ISの腕部分に人の手は奥まで入らない。せいぜい短くても手首少し前辺りだろう。

そこから考えると手首部分は切り落としても人体に何の支障もない。脚も同様。ISの脚部のひざ部分までなら切断しても大丈夫だ。まあ、戦闘では十分大丈夫ではないのだが。

だが問題はそこじゃない。

本当の問題は、ISの本体破損だ。

通常、手持ち武器や両肩などに浮いている装備は破壊可能だ。

だが本体はISの絶対防御で守られているため破壊は不可能なはず。絶対防御は絶対にカットできないシステムになっている。

つまり、アルは相手のISの絶対防御をカットしているのだ。

「こ、こんなの、無効ですわ！」

セシリアの叫びはアルに届いていない。

今度は左手で持っていたライフルを横に一刀両断され爆発する。

そしてそのまま本来の目標であるセシリア自身に斬りかかるうとした時だ。

『試合終了。勝者 アルフォンス・ラプラス』

放送が鳴り響いた。

状況的にはいいタイミングだ。

使える武器もない状況でいたぶるのは良くない。

だがアルはやめようとはしない。

先ほどの状態からまたセシリアに攻撃を仕掛けようとしてくる。

驚くセシリアに構わずサーベルを振りかざす。

間一髪のところ回避に成功したセシリアは、急いでピットまで戻り、ISを解除する。すると予想は的中。敵がいなくなり、アルは動きを止めた。

赤く発光していた内部装甲は色を失い灰色に戻る。

開いた外装が徐々に閉じていき、最終的にはヘッドギアの一本角が閉じると同時に、強制的にISが解除された。

「!？」

ISを解除するのは別に良い。

だが場所が問題だ。アルが解除した場所はるか上空。落ちれば死は免れないだろう。

「おっと、あつぶなかった」

上空から頭から落ちていくアルを何かが受け止める。

それは、先ほど自分が戦っていた相手、一夏だ。

急いで白式を展開させ、ピットから飛んできたのだ。

「・・・」

「気絶しちゃってるみたい・・・なんで？」

『なんでもいい。心配だと思っなら早く戻って保健室に連れて行ってやれ』

「は、はい！」

第07話 クラス代表決定戦 後篇（後書き）

はい、セシリアフルボッコのターンでしたw
あれですね。ISって手とか足とか長いですからね。
手首の切断とかはもはや自己解釈です。

次回はアル君が目を覚ましたあたりから。
その後にクラス代表決定パーティーかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第08話 クラス代表就任パーティ

「あ、起きた？」

夕方だいたい5時過ぎ。

セシリアとの試合で気絶してしまったアルがようやく目を覚ました。

寝ぼけながらも、ここがどこだか確認する。

目の前には一夏と知らない天井。

ベッドに寝ているということ考えると保健室だと確信した。

「大丈夫？」

「ずっと寝てたの？僕」

「うん。かれこれ・・・2時間ぐらい？」

「そ・・・」

何も覚えていない。

途中からの記憶がかけらもない。

いや、思い出したいくない。

どうしてあんなことになったのかもわからない。

一角にあんなシステムが組み込まれていたなんて、束から聞いたこともなかったし、現に調整をしても見当たらなかった。

ビームサーベル一本であそこまでできる物なのか。

ビット6機をすべて両断、ライフルを横に一閃、武器を持った右手

首を武器ごと切り落とす。どうやって相手の絶対防御をカットしたかもわからない。

「おなか減ってきたな・・・」

「じゃ、食堂行こ。確か、今アルのクラス代表就任記念パーティーの準備してるはずだから」

「？ あ、そつか。僕、あんな形でもセシリアに勝っちゃったんだっけ」

ちよつと落ち込み気味のアル。
そんなアルを見かねた一夏は、アルの頭をなでた。

突然のことに少し驚くが、抵抗はしない。
なんだか懐かしい感じがしたのだ。

「さ、行こ」

「・・・うん！」

side out

『アル君、クラス代表決定おめでとう！』

食堂に着くや否や、突然のクラッカーで驚くアル。
何かの癖か、一夏の後ろに隠れてしまった。

そんなアルをまた慰める一夏。

みんなそれを見て笑顔になりながら、アル君可愛い、などと思っているのだろう。

「いや、これでクラス代表戦も盛り上がるね」

「ほんとほんと」

「ラッキーだね、同じクラスになれて」

人が多い気がするのはいのせいではない。

相づちをうっているのはたぶん2組の生徒だろう。

なんで2組がいるのかは気にしてはいけないのかもしれない。

「あ、セシリア」

奥の方に座っているセシリアを見つけ、声をかける。

一応反応してくれたようで、立ちあがってこちらまで来てくれた。

喋ろうとするセシリアに、アルは先に喋りだして遮る。

前のセシリアならこれだけで怒りだしていただろう

だが今回は怒りを見せない。なぜなら

（上目使いなんて、卑怯ですわ！しかも泣き目なんて！）

そう。アルは目尻にちよつとだけ涙を浮かべてセシリアを見上げていた。

こんな状況で大きな声なんて出せないし、ましてや怒りを見せるなんてもつてのほかだ。まあ、もともとそんなつもりはないが。

「僕がセシリアのIS大破させちゃったし、試合終わったのに襲いかかったりしたし、謝ろうと思うんだ。ごめんね」

「い、いえ、わたくしも大人気なかったですわ。余裕を見せて見くびっていたから、アの結果はしょうがないことです。ブルー・ティアーズはもう予備パーツで修理済みですの」

「本当にごめんね」

最終的にはセシリアの手を握るアル。

何というか、物凄く可愛い。冗談抜きで本当だ。

男の娘の若干の泣き顔はいろんな意味で最強の武器かもしれない。

「はいはい、新聞部です。話題の新生アルフォンス・ラプラス君ことアル君に特別インタビューに来ました〜！」

セシリアとの仲直りも経て新聞部の生徒が登場。

みんな、オー、と驚いている。アルとしては迷惑だが。

「あ、私は二年生の黛薰子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

「あ、ご丁寧にどうも　って画数多っ！」

「良く言われる。では気を取り直してアル君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

ボイスレコーダーを取り出し、無邪気な子供のように瞳をキラキラ輝かせている薰子。こう言うのは本当に慣れていないのでアルは困惑気味だ。

「えっと・・・頑張りたいと思います」

「えー、もつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか」

「ええっ！？うん・・・じゃあ、僕がクラス代表になったkらは絶対に優勝に導く！とか？」

「あ、じゃ、それでいいや。ダメそうだったら適当にねつ造しとくし」

それでいいのか新聞部副部長。

ねつ造なんてしたって何の得にもならない。特にアルが。

まあ、新聞部自体は何かの得になるのだろうが、本当にやめてほしい限りだ。

「じゃ、写真撮ろうか。ほら、セシリアちゃんと並んで並んで」

「え、ええ・・・」

「注目の専用機持ちだからね。あ、そついえばもう一人いるんだよね？確か織斑先生の妹さん！その子も一緒に！」

「え、あ、はい」

「あ、名前教えて」

「織斑一夏です」

「一夏ちゃんね。よし、覚えたわ。さあ、3人とも早く並んで」

アルを挟んで左に一夏、右になぜかちょっと残念がつているセシリアが並ぶ。なんだかでこぼこしていて見栄えが悪いかもしれないが気にしてはいけない。

アルは作り笑顔が作れなくて大変そうだ。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え!？」

「え、えっと・・・」

「74・375」

「「速っ!」」

パシャツツ

突然の黨の問題に答えられないであわてる2人と、何の迷いもなく言われた瞬間に正確な答えを言い放つアル。

そしてその状態のままシャッターが切られた。

だがそんな一瞬で、1組メンバーが驚くべき行動力を持ってして撮影の瞬間に割り込んできた。無駄にすごいと言えない。

「何故全員入ってますの!」

「まーまー」

「セシリアと一夏だけずるいじゃん」

「3人だけじゃなく、クラス皆の思い出にしようよ」

言い訳、もとい説得。

結構な正論を言っているのでセシリアは返せない。

一夏は別に気にしてない。むしろセシリアとアルのツーショットを防げただけで十分満足だ。

「ふ、あゝ、眠い・・・」

この『アル君クラス代表就任パーティ』は夜10時まで続いた。

10時を前にしてアルが寝てしまったのは言うまでもない。

こつ言うときの女子のエネルギーは侮れないと再確認したアルだった。

第08話 クラス代表就任パーティ（後書き）

次回からクラス代表戦！

鈴が転校してきますね。

というか本当にどんなタイミングで篇を出そうw

一応クラスの人などは知りあってる状態なので、いつでも出せる
っちゃ出せるんですけど、どうもうまくいかなくて・・・。

一夏の付き添いみたいな感じで出せばいいのかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第09話 転校生（中国）（前書き）

こ、今回こそ筈を！

という訳でちょびつとだけと出ます（え

まあ、紅椿が出るまでは基本空気ですよ。ね。
もうそれは確定事項なのかもしれない。

第09話 転校生（中国）

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。オルコット、織斑、アルフォンス。ためしに飛んでみせろ」

クラス代表が決定し、ひと段落したころ。

鬼教官こと千冬のIS実習の授業。

開始早々の指名だ。専用機持ちの運命だろうか。

呼ばれたセシリアは即座に展開。

アルも数回程度だが展開したことがあるのでその次に展開。だが一夏は3回目なので中々展開できないでいた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」

「うう・・・集中・・・」

せかされて右手の白い腕輪に意識を集中させる。

ISは一度フィッティングを終了させるとアクセサリーの状態になって待機している。ちなみに一夏の白式が最初から腕輪の状態なのは、束が一夏のデータ（簡易的な）を入れておいたからだ。

なのでセシリアの場合は左耳のイヤークラス、アルの場合は純白のネックレストップということになる。

「白式！」

中々展開できないので最終手段。

ISを展開するときは機体名を、武装を展開するときは武装名をコールすることで簡単に展開できる。

教科書の頭の方にも書かれていて、別名『初心者方法』とも呼ばれるらしい。

それにより一夏は白式の展開に成功。
白いISを身にまとった一夏は、ようやく出来た、と一安心している。

「よし、飛べ」

言われて行動が速いのはいいことだ。

急上昇し、頭のはるか上にいるセシリア。
それに遅れてアルと一夏が続く。

『遅い。スペック上の出力では一番が一角、その次に白式が上なんだぞ』

一番前をセシリアが、やはりその後をアルと一夏が続く。
さすがにそんなことを言われても候補生と数回程度しか展開させた生徒と一緒にしないでほしい。
アルの場合、自分でどうやっていたかも覚えていないのに。

「遅いって言われてもなあ・・・」

「しょうがないよね」

一夏とアルは少し愚痴っている。
まあ、それは本当にどうしようもない。
『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で飛ぶらしいが、理屈じゃどうにもできない。もはや感覚の域だ。

『よし、次は急降下と完全停止をやって見せる。目標は地上から10cm』

「了解です。では、お先に”アルさん”」

「ん？うん」

ちよつと何か違和感を感じたか一瞬疑問に思った。

気がつくときセシリアはすでに急降下中で地上すれすれで停止している。

目標の高さで出来たかどうか分からないが、さすが候補生といったところだろう。

「じゃ、今度は僕が」

上空から一気に急降下。

スペック上一番出力が高いので降下する速度も半端じゃない。

意外にこのまま隕石のように落ちるってパターンがあるかもしれないが、さすがにそんなへまはしない。

というか、これもどうしてか体が覚えていた。

頭から降下し、地上前で一回転。

脚を下に向けてバックパックのバーニアで停止。

地上から9cmとギリギリで惜しいが、意外にセシリアよりも良かったらしい。（セシリアは地上から7cm）

「あ、これはやばいんじゃないかな？」

空を見ていると一夏が落ちてきていた。そう、隕石のごとく。

ものすごいスピードで落ちてきている。まさに流星のようだ。

だがそんなことを考えている場合じゃない。

このままだと直撃する。アルとグラウンドに。

しかし、そんな中でもアルはしっかり考えている。

すぐさま一夏がそれを実行してくるかどうかで変わってくるが、言わないことには変わらないのでとりあえず指示する。

「一夏、ISを解除して！」

『ええ！？何で！？』

「いいから！」

『わ、わかった！』

空中の後十数メートルほどで地上に落ちそうな所でISを解除する一夏。

疑問に思うクラスメイトと千冬に山田先生。

だがそんなのお構いなしでアルは一夏の方へ飛んだ。

空中で一夏を受け止め、グラウンド直撃を免れる。

当の本人は目尻に涙を浮かべていて、本当に怖かったようだ。

「大丈夫？怪我とかない？頭くらくらするゝとか、そういうのもない？」

「だ、大丈夫だよ。ありがとう」

俗に言うお姫様だっこ（無意識）の状態。

すぐに地上に降りたため一夏はすぐアルの手の中から出た。

「まったく、無茶をするなバカども」

「す、すみません・・・」

「ごめんなさい・・・」

千冬に怒られるのは毎回のごとく当然の様だ。

side out

「2組に転校生？」

翌日の朝。

クラスで話題になっていたことを聞いた。

先ほど言った通り、2組に転校生が来たようだ。

今はまだ4月なのに急なことで話題になるのはわかる。

だが何故この時期なのだろうと疑問だった。

「別にこのクラスに転入してくるわけじゃないんだ。騒ぐほどではないだろう」

「まあまあ、こう言うのって結構気になるじゃん。実際箒ちゃんも気になるでしょ？」

「・・・ま、少しな」

横では一夏と篤が会話中。

当初、アルは『篠ノ之さん』と呼んでいたが、話していて仲良くなり、束の妹ということもあって今の呼び方になったようで、一夏の幼馴染で親友らしい。

それと意外に空気なのは気にしてはいけないのだろう。
本人も気にしているらしいので言っではいけない。

「なんでも、中国の代表候補生なんだって」

「中国かぁ。中華がおいしいよね」

食べ物大好きなアルは基本そういう風に考える。
どこかの国〃その国のおいしいもの。

ちなみに中華はアルの大好物でもある。

一番は麺類で坦々麺。それとチンジャオロース。

「わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「いや、たぶんアル君がいるからだと思うよ」

代表候補生といえバセシリア。

クラスメイトに何の遠慮もなく突っ込みを入れられる辺りを見ると
もはや普通の生徒だ。代表候補生なんて関係ない。
すでにお決まりのお気に入りポーズをしている。

「それとその転校生と2組のクラス代表が交換になったんだって」

「へえ」。勝てるかなあ・・・」

「今のところ専用機を持つてゐるのって1組と4組だけだから余裕だよ」

現在クラス代表で専用機を持つてゐるのは1組と4組だけ。

まあ、1組には3人も専用機持ちがいるので、違う意味では当然専用機持ちが代表になるだろう。4組の生徒は少しどんまいと言える。こつ言つのは半分押し付けになってしまうからだ。

やいやいと盛り上がっているクラスメイト。

そろそろSHRの時間なので人が多くなってきたからだろう。そんな事を考えている時だった。

「その情報、古いよ」

入口あたりから声が聞こえる。

その声に全員が視線を向けた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

少し小柄なツインテールの少女。

改造OKな制服を少しばかり改造している。

片手を腰に当て、ちよつと勝気そうで八重歯が見えている少女をア
ルは知っていた。

「ま、まさか・・・鈴ちゃん？」

「そう、中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

少女の名は凰鈴音。

自分で言っていたように中国代表候補生だ。

一夏も知っているようでアルはちよつとびっくりだ。

「鈴姉、かつこつけてるのはいいけど、全然似合っていないよ・・・」

「んなつ！？あんだ、毎回毎回会うことになんで小馬鹿にしてくるのよ！」

「小馬鹿にしてるつもりなんてないよ・・・ただ、今の方が鈴姉らしいから・・・あ」

「おい」

「何よ！？」

バシンツ！

聞き返した相手は鬼教官。

そして例によって例がごとく出席簿アタック。

「もうSHRの時間だぞ。教室に戻れ」

「ち、千冬さ」

バシィツ！！

さつきよりも強烈そう、否、強烈な一撃。

鈴は痛みに頭を押さえている。

「織斑先生と呼べ。そしてさっさと戻れ。入り口をふさぐな。邪魔

だ。どけ」

「す、すみません・・・」

痛みをこらえながらちよつと泣き目で入口からどく鈴。
完璧に、100%千冬に対してビビっている。

「また後で来るからね！逃げないでよ、アル！」

そんな捨て台詞を言い残して鈴は自分の教室に戻って行った。

第09話 転校生（中国）（後書き）

今回はアルじゃなくて一夏と鈴が喧嘩します。

まあ、理由はまだ考えついてないんですけどね。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第10話 口喧嘩（前書き）

まさか！今回も箒が（ちょびつとだが）出るとは！
書いててなんでかさりげなく箒が入ってきましたw（え

ということでも今回もちょっとだけ箒が出ます。

それと、紅椿が出るまでは基本空気になることが決定しました。
箒ファンの皆さんすいません。

第10話 口喧嘩

「待ってたわよ、アル！」

食堂につき、どーんと待ち構えていたのは噂の転校生の鈴。

小さいころから突き通しているツインテール（正しくはサイドアップテール）をなびかせ、手にはトレイを持っている。

ちなみに鎮座するは醤油ラーメン。

「とりあえず、どいてもらえると嬉しいな。後、そこにいると通行の邪魔になるんじゃない……」

「わ、わかってるわよ！」

「それと、のびるよ」

「それもわかってるわよ！大体、あんたを待ってたんでしょうが！なんでもっと早く来ないのよ！」

「それなら先に席取って待ってればいいのに。とりえず、席取っておいて。僕も貰ったらすぐ行くから」

「……早くしなさいよ」

軽い会話が終了。

諦めた鈴は空いているテーブルを探しに行く。

それを確認したアルは最速で特盛りラーメンを注文。
一夏は少しくすくす笑っていた。丸1年会ってなく、久しぶりなの

で楽しそうだ。

その後ろで箸は誰？みたいな顔をしないで、さらにその後ろでセシリアが焦り気味な、というかバリッバリ焦った顔をしていた。新キヤラ登場で焦るのはやはりサブキヤラの運命なのか。

少ししてから注文した料理が出された。

特盛りの器がアルの顔より大きいのは気のせいじゃない。

きよろきよろしてから鈴がいるテーブルを見つけ、トレイを持った一夏と一緒に座ることに。

「鈴ちゃん、いつ日本に帰ってきたの？おばさん元気？いつ候補生になったの？」

「ちょ、一夏、質問多いってば・・・て言うか、何1人で黙々と食ってたのよ！」

「ごくごくっ）ん？」

すでに汁を飲み終えようとしているアル。

この早食いはみているだけでおなかいっぱいになりそうだ。

こんな小柄なのにこんな大食いなのはやはり驚く。

大食い大会に出れば大きな巨漢の男でも簡単に撃破できるだろう。

それと、大量に食べたものがどこに行くかわからないというのもまた不思議。ついでに言うならアルはどれだけ食べても太らない。多めに食べる方の女子も、アルをみて羨ましそうだ。

「ふう・・・で？」

「『で?』じゃないわよ、『で?』じゃ!」

「ならどう返せばいいの・・・」

「2人とも知り合いだったんだね。私、ビックリしちゃったよ。いつ知り合ったの?というかどうかという関係?まさか付き合ってるのか?」

何気に質問の多い一夏。

本当に久しぶりでいろいろ話したいのだろう。

「なっ、一夏、何言って!」

「まさか、それはないよ」

「・・・」

「えっ、なに?」

「なんでもないわよ!」

いきなり睨まれてから怒られる。

アルは、何かしたかなあ、と疑問。

まあ、何かしたから怒っているわけだが。

「あ、そうだ、紹介するね。箒ちゃんが引越した後に転校してきた凰鈴音ちゃん。略して鈴ちゃん。箒ちゃんがファースト幼馴染なら、鈴ちゃんはセカンド幼馴染ってかんじ」

「ああ、どうりで仲がいいのか。私は篠ノ之箒だ。よろしく頼む」

「あゝ、よろしく」

握手を交わして挨拶終了。

先ほどからセシリアが空気状態だ。

どうにかして喋りだそうとするが中々タイミングが見当たらない。
もはや今回は見せ場なしだろう。

そして気がつけばアルは特盛りラーメン5杯目に突入していた。

今までの少しの時間でどれだけ食べるつもりだろうか。
というかどれだけ入るかが気になる。

「今日の夜はあんかけ焼きそばが食べたいなあ」

『もう夜ごはんのこと考えてる！？』

「あ、今食べればいいのか。すいませーん、あんかけ焼きそばください。特盛りでー」

『まだ入るの！？』

「余裕のよっちゃんってやつだよ」

『ギャグが古い！』

「ええっ」

食堂にいた生徒全員に突っ込みをいれられた。

side out

「という訳で、部屋代わって？」

時間は過ぎて夜8時を回ったところ。

夕食は宣言通りあんかけ焼きそばの特盛り。

ついでにチンジャオロースと中華オンリ！

アルは好物がたくさんで、食事中は常に笑顔と白米のおかわりが絶えなかった。

そして先ほど鈴が来てこの状態。

ポストンバック一つだけを持ってきた。

「いやいや、何がという訳なの！？」

「いくら年下といってもアルは男。男が同室じゃ、一夏もイヤですよ？私は平気だから代わってあげようかなって」

「いや、別にイヤでは・・・」

「別にいいじゃない。ね？」

「ね？じゃない！というか、鈴ちゃん急すぎ！..」

入口で絶賛口論中の2人。

正直言って迷惑なので他でやってほしいが、アルにそんなことを言える勇気などないので、しぶしぶヘッドフォンをしてバイザー型のIS調整機などを使って一角を調整している。

ビームマグナムが1丁にEパックの予備とすでに装填されているので合計15発。ハイパーバズーカが2つに種類別の弾が数種。

ビームがトリングガンが合計で4挺にシールド2枚。

ビームサーベルが両腕に2基、バックパックに2基でオールOKだ。

「ああ！もういいわよ！一夏なんて大っきらい！」

「私だってそういう鈴ちゃん嫌いだよ！」

気がつけば2人は口論から口喧嘩に早変わり。

お互いがお互いを「嫌い」といつて絵に描いたようだ。

ヘッドフォンをしていたのでアルの耳には入っていない。

バイザーで目を覆っているのどんな状況かもわからない。

はつきり言って無関係だが、アルは何が起きているか少し気になっていた。

「一夏？」

「先に寝るから。寝るとき電気消して」

「え？でも、まだ8時だよ？」

「いいから私は寝るの！お休み！」

鈴がドアをこれでもかといわんばかりに閉める音でようやく気がつく。

一夏の名を呼び、どういう状況下聞こうと思ったが、返事は斜め上。すぐさま寝間着に着換えた一夏は自分のベッドに入り、うつ伏せに

なつて布団をかぶるようにして寝てしまった。

それを見てアルは何があつたかわからないでいる。
突然大きな音がしたかと思えば一夏は怒り気味。

さっきまで鈴姉がいた＋大きな音がしてから鈴姉がいない＋一夏が
物凄く不機嫌〃・・・まさか喧嘩？

ちょっとおかしいが状況推測。

一人納得したアルは、シャワーを浴びてから眠ることにした。

第10話 口喧嘩（後書き）

一夏と鈴の喧嘩でした。

理由としては、部屋を代わってほしい 性格の問題 お互い頑固
融通が聞かないから嫌いみたいな感じですかね（笑）

次回はたぶんクラス対抗戦だと思います。

アルが2人を仲直りさせようとちょっとだけ奮闘する（かも？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第11話 クラス対抗戦（前書き）

今回はいつもより長め。

何というか引きずり過ぎたからですかね。

そして終盤はゴーレムが乱入してきますがもう一機・・・？

第11話 クラス対抗戦

翌日。

一夏はやはり不機嫌だった。

そして1組にやってこない鈴を見つけたが、やっぱり不機嫌。

一夏は鈴ほどではないが、鈴は全体的に『怒ってますオーラ』を出していた。廊下で一夏と会ったときはスルー、目があってもすぐにそらす。

食堂で会えば露骨にふんつと鼻を鳴らしながら背中を向けるなど、喧嘩したということが丸わかりだ。

「あ、対戦表。今日発表だったんだ」

放課後、一夏と廊下を歩いていると、ふと目に入ったもの。

アルはクラス代表なので、対抗戦に出る。

対戦相手は

一回戦

1年1組 アルフォンス・ラプラス

vs

1年2組 凰 鈴音

と、少し狙ったような組み合わせ。

これを見たアルは考え出した。

（一夏と鈴姉は喧嘩してるんだよね？実際本人喧嘩してるって言うてたし。これって、仲直りのチャンスじゃ？）

気になった結果、本人に直接聞いた。

一夏はちよつと言いにくそうに、喧嘩した、と言った。

鈴の場合少し怒りながら言い、また不機嫌になってすぐにどこかに行ってしまった。

「一夏、鈴姉と仲直りしたくない？」

「・・・し、したいよ？でも、喧嘩した翌日だし、私からは言いにくいし、その・・・」

「じゃあ、僕に任せて！クラス対抗戦まで引き延ばしになるけど、絶対に仲直りできるようにするから！」

「え？あゝ、えつと、いいの？というかどうやって？」

「うん。えつとね」

side out

そんなこんなでまた翌日。

一夏はアルの提案（仲直り計画）を快くOKしてくれた。

まあ、基本動くのはアルになってしまふのだが。

現在の時刻は昼。

アルは2組手前にいる。

「あ、来た。鈴姉」

「なによ」

「お昼食べに行こ」

「なんであんたと昼食べなきゃなんないのよ」

「え、だって僕まだ食べてないし。鈴姉も今から食べるんでしょ？だから一緒に食べようかなって」

とりあえず、仲直りさせるためには接触あるのみ。

こう言うときのアルはいつもの引き気味でおろおろしたりした弱いアルとは一味違い、積極的かつやる気がすごい。だが不機嫌の鈴の壁は少しばかり分厚かった。

「なら一夏と食べればいいじゃない。いつも一緒なんだから」

「それがね、一夏、先に他の人と食べちゃったんだって。1人で食べるのさびしいから、ダメ？」

「う・・・はあ、しょうがないわね。今回だけよ」

「やった！」

半分嘘で半分本当。

一夏が先に食べたのは本当だ。だがアルは1人で食べるのがさびしいなんてちよつとも思ったことがない。

少しあれかもしれないが、束と会うまでは基本1人だ。

両親は夜遅くまで仕事、兄はISの技術者、そして姉はIS操縦者。

当然帰りが遅い、もしくは帰ってこない。

まあ、そんな話は置いておいて。

了承してくれた鈴とともに食堂へ向かう。

今日も中華を頼むアル。

それに続いて鈴も中華を頼んだ。

「鈴姉って、一夏と仲直りしたいとか思ってたんの？」

「な！？そんなこと思ってるわけ・・・あると言えばあるわね・・・」

「（ビンゴ！）なら、仲直りすれば？」

「そんなの言いにくいじゃない。あたしから言いだしたのに、あたしから謝るの、すっごく気まずいと思うし」

鈴も一夏同様に仲直りしたい気分。

でもやはり言いにくそうだ。しかも先に言いだしたのが自分なだけあって物凄く気まずい。小学校のころに喧嘩したことがあったがどう仲直りしたかとも思い出せなさそうだ。

「そういえば、クラス対抗戦の一回戦って鈴姉が相手だよね？」

「いきなり話題変えないでくれる！？　　って、あ」

「あ、気付いた？クラス対抗戦で、僕が勝ったら鈴姉から謝る。鈴姉が勝ったら一夏から謝る。その代わり、勝った方には僕がなんでも言うこと聞いてあげるよ。一つだけだけどね」

「・・・何、あたしに勝つ気でいるのよ」

「うん。だって普通は言いだしつpeg謝るものでしょ？だから僕が勝たないといけないし」

一夏はクラス代表ではないので対抗戦には出れない。
変更しようにも、すでに組み合わせは決まっている。
なのでアルが戦うしかない。

そこで考えたのがこの案。

一夏が戦えないから代わりにアルが戦い、負けた方から謝る。
そしてそれだけだと乗ってくれないのでアルの条件。

勝てば一夏、負ければ鈴の言うことを聞く。

アル本人としては、あまり無茶な事は言わないだろうと考えての条件だ。

「いいわよ、やってやろうじゃない。その代わり、あたしが勝つんだから覚悟しなさいよね」

「じゃ、決まりね」

ウィンクをしながら鈴を軽く指さすアル。

これではクラス対抗戦を待つだけとなった。

それまでに2人が仲直りしてしまったらという考えがあっただが、気にしたら絶対に負けだ。

side out

2週間後でようやく5月。

試合当日となり、第2アリーナ第一試合が始まろうとしていた。

2人とも噂の新生、しかも片方は男ということもあってアリーナは全席満員。さらには通路も立って観戦する生徒で埋めるつくされている。

会場入りできない人はリアルタイムモニターで観戦らしい。

（落ちつけ・・・落ちつくんだ。ああ、でもこんなに人いると緊張するなあ・・・）

目の前には鈴と赤み掛った黒色のIS『甲龍』

セシリアのブルー・ティアーズとは違い、近距離格闘型。

背中には主力武器の『双天月牙』

アルは前と変わらず純白のIS『一角』

左手にはシールド、右手には何も持っていなかったが、先ほどビームガトリングガンで1挺だけコールし手で持っている。

正体不明だった変身した姿は、リミッターが解除された一角の本当の姿で『デストロイモード』と呼ばれるものが判明した。

束から受け取った設計図を見て、ほとんど自分で作ったはずのISなのにこんな機能があったとは知らなかったと激しく後悔。

おかげで調整に時間を割きすぎしまい、訓練時間が短くなったほどだ。

『それでは両者、既定の位置まで移動してください』

アナウンスが流れ、移動する2人。

ビームガトリングガンのエネルギーはまだまだたまっていない。

背中に手を回し、双天月牙を構える鈴。

アルはその場で目をつぶって落ち着きを取り戻そうとしていたが、それを見た鈴は一瞬いらつときで、いたぶることを決める。

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーツと、ブザーが鳴ると同時に鈴は斬りかかる。

ガキンッ！！

鈴の攻撃を間一髪のところまで防ぐアル。

遠距離武器は近距離では使えない。使ったら自分まで被害を食らう。

「初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど

」

振り払い、いったん距離をとる。

チラッとガトリングガンのエネルギーをみる。

現在エネルギー充填率は70%

まだ撃てそうにない。

マグナムよりも使い勝手がいいと言えいいのだが、この充填時間が難点といったところか。

撃つてこないアルに対し、どんどん攻撃的になる鈴。

離れ続けて距離を取ろうとしてもすぐに詰められる。

正直言って、消耗戦は体力が少ない方のアルは苦手だ。

「 甘いわよ！」

「っ！？」

突然両肩の非固定浮遊部位が開いた。

そして中心の球体が光って、アルの偶然構えていたシールドに当り、アルはその衝撃で”殴り”飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

にやりと笑う鈴。

牽制の後は絶対に本命が来るものだ。

この状況だと、さつきよりも数が多く来る。

ガガガガガッツ！！！！

構えたシールドに大量の何か 『衝撃砲』が当たる。

先ほどから防戦一方のアルはもう一度エネルギーを確認した。

98 / 99 / 100 % 充填完了

それを見たアルは不敵に笑みを浮かべる。

最初の防戦から、今度はこちらの番だ。

ガトリングガンを構え、そしてトリガーを引く。

キュウウ・・・ガガガガガッツ！！！！

まず4つの砲身が回転を始め、緑色のビームが大量に撃ちだされる。

突然のことに驚く鈴だが、さすがは候補生。

すぐさま遠距離武器を使わせまいと、回避し接近して来た。

だがアルもずつと接近されて終わりではない。
左手のビームサーベルを外し、空中でキャッチして展開する。
そしてそのまま鈴の双天月牙を受け止めた。

「いきなりやる気出したわね」

「僕、負けるのイヤだから。姉譲りでね！」

バシッ！

アルが振り払い、距離をとる。

お互いがにらみ合い、周りの歓声が盛り上がる。

白熱した試合はどちらが勝つかわからない。

今度は2人が同時に動いた時だ。

ズドオオオオンッッ！！！

「っ！？」

突然大きな衝撃がアリーナを襲う。

アリーナ中央からは大きな煙が上がり、上を向くとアリーナの遮断
シールドを突破してきたのがわかる。

やがて、煙から出てきたのは黒いIS。

全身装甲。アルの一角と同タイプで両腕のビーム砲が特徴的だ。

襲ってくる！

そう思い、構えた時だ。

再びアリーナに衝撃が走る。

壊された遮断シールドのむこう側から、緑色のビームが入ってきた。そしてそのビームを撃った張本人がアリーナに侵入してくる。

「ま、また、全身装甲・・・」

それはまたIS。

全身装甲で緑色。4枚の羽のようなバインダーが特徴的で、通常のISと比べたら一回りか二回りほど大きく、巨大だ。

そしてそのISはアルと鈴を無視し、黒いISに突っ込む。近づかせまいと必死に振り払おうとする動きや、正確無比のスラスタ操作。さらには待機中に襲ってこないところを見ると、黒いISは無人機を思わせる。

やがて、黒いISは緑のISに捕まった。

前側の羽に隠された隠し腕が両腕をつかみ、攻撃を許さない。

さらに両足も後ろの羽から出てきた隠し腕に掴まれ、完璧に身動きを封じられる。もはや逃げ場なしだ。

バチッ・・・

ドギユウウンッッ!!!!!!

何の躊躇もなしに、緑のISは解除された黒いISの操縦者を撃った。

そしてそれは爆破され、破壊される一瞬で見えた風穴から無人機だとわかる。

にやりと口元が笑うISの手にはISのコアが握られていた。

第11話 クラス対抗戦（後書き）

うーん、なんだか最後の方が無理やりすぎる？
ちなみに最後にやった行動はリムーバーです。

捕縛する リムーバー 操縦者（機械）が残る 撃って壊す コア
貰い

みたいな感じ？

そして緑のISはもちろんクシャトリヤです。はい。

次回は鈴&アルvsクシャトリヤ（操縦者不明）
リムーバーがあるから勝てるのか・・・？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第12話 叫び（前書き）

今回はアル君（一角）vs4枚羽！

勝つのはどっちだ！？

そして総合pvが20000pvを突破しました！

これからもがんばっていききたいので応援よろしくです！！

第12話 叫び

『いいか、アル。ピンチの時は自分が大切にしているものの名前を叫べ。母さんや父さんでもいい。俺の名前でも、
の名前でもいい。ただし、神様なんて現実にはないものはやめろよ。空想なんて助けちゃいけないんだからよ』

ふと頭に浮かんだ兄の言葉。

家族が殺された時のショックから、一部の記憶は忘れた。だけど、覚えてることはたくさんある。

母や父とこと。

兄と一緒に風呂に入ったり遊んだこと。

姉に勉強を教えてもらったり、料理をしたこと。

他にもたくさん。

（なんで、今こんなことを思い出したんだ・・・？）

今は戦闘中。

目の前には右手にISコアを持った緑で全身装甲のIS（以降4枚羽）。

先ほどの黒い無人のISとは違い、バイザーをしているが口元が見える。

特徴的な4枚の羽、通常のISより大きなボディ。

モノアイのバイザーはこちらを見据えている。

（何だろう・・・どこかで見たことがあるような・・・いや、それはない。こんな全身装甲のISなんて、一角しか見たことない）

頭の中で自問自答を繰り返すアル。

記憶の中を探るが、目の前のISのことなんて知らない。
知らないのに、どこかで見た覚えがあった。

それに対し、4枚羽も動かない。

まるでこちらの出方をうかがっているかのようだ。

右手に持っていたISのコアは羽の中の1枚にしまっている。

どちらも動かず、それと同じで鈴も動けないでいた。

感覚でわかる。この手の相手はかなりの技量を持っている。

自分じゃ勝ち目がないことを思わせたいた。

（どうやってコアを取りだしたんだ？手に何か持ってるようには見えなかったけど・・・）

襲ってこない間、考え出しす。

コアを取り出す、というよりコアにするにはまず本体を解体してから初期化が必要だ。その工程を全くと言っていいほど無視したあのISは、現にコアを持っている。

そんなことを考え出したアルは、大がつくほどの馬鹿者だった。

「っ！？」

全員が静止する状況の中、4枚羽が突然動きだした。
しかも今度の目標はアルだ。

本体の両腕でアルの両腕を、前羽の隠し腕でアルの肩を捕まえる。
後ろの2枚のバインダー内のバーニアは一斉に点火。

そしてそのまま力押しで斜め下、地面に向けて加速を始めた。

「ぐっ……！うう……がはっ！！？」

アリーナの壁にたたきつけられ、痛みから力が抜ける。

そして脱力したアルを4枚羽は持ち上げ、そのまま腹を殴り気絶させた。ISは起動したままだが、先ほどの黒いISと同じようにコアを抜き取られる。

地面に倒れるアルは涙を浮かべていた。

それを見ている4枚羽の操縦者は少しの間動きを止める。

左手にある純白で菱型の形をした一角のコアを見つめ、また再びアルを見ていた。

「おねえ、ちゃん……」

「っ！　　！？」

ガキンツッ！！

真後ろから双天月牙で斬りかかる鈴。

その攻撃は後ろの羽の隠し腕が持ったビームサーベル2基に防がれた。

「あんた！何やってんのよ！」

「……中国の『甲龍』か。良いだろう、相手になってやる」

4枚羽が喋りだしたことに驚く鈴。

もし勝てないとしても、あの手の中にあるコアだけは奪い返す。

相手は異形のIS。確実に鈴やセシリアの専用機と同じかそれ以上の性能だろう。それでも、鈴は引き下がりがりたくなかった。

目の前で何もできないまま崩れ去ったアルを見て、自分だけ助かるなんてできない。それなら自分もやられた方がましだ。

「それ、返してもらわよ！」

距離を取られ、衝撃砲を乱射する。

その攻撃は、すべて前羽2枚がシールドとなって防ぐ。

2本の双天月牙を連結させ、今度は接近戦に持ち込んだ。

だが所詮は代表候補生止まり。熟練したIS操縦者になう訳がない。

右手に持ったビームサーベル一本ですべて受け止められる。

「この距離なら！」

「ほお・・・やるな。だが」

「

両肩のアーマーが開き、衝撃砲を撃とうとする。

捨て身の攻撃に、4枚羽も少し驚いているようだ。

だが正直言って、驚いた程度だ。

「候補生ごときがいきがるなよ」

「っ！？」

突然、衝撃砲が爆破する。

気がつけば、周りにいくつも小さなビットの様なものが浮いている。それが衝撃砲を破壊したのだ。

「まあ、私にこれを使わせたことは褒めてやる。さあ、お前のISのコアも貰うでしょう」

side out

（一角が奪われた・・・僕が束姉とあの子と一緒にいる間、僕のををかけてあげた機体が・・・）

一角はアルが自分の全てをかけた機体。完成までの年月は、約3年間。

寝る時間を惜しんでまで、料理をする時間を惜しんでまで、毎日調整を繰り返し、完成まで持つて行った。

途中、ドイツでの試験使用では全然わからなかったが、セシリアとの戦いで一角のことがたくさんわかってきた。なのに一瞬で奪われた、なんて考えると嫌気がさす。

『大切なものの名を叫べ』

頭の中に浮かんだ兄の言葉。

ピンチの時は神様に願え、なんてよく言うが、神様なんていない。

だから誰かに、何かに願えと言っていた。だから今がその時なのかもしれない。

「うう・・・」

「あつけないな。もう少し粘ると思ったのだが」

朦朧とする意識の中、ゆがむ視線の先では鈴がいた。

ISは解除され、4枚羽の足元で倒れている。

そして右腕には甲龍のコアが握られていた。

「・・・ニコーン・・・」

「っ?」

「ハア、ハア・・・ユニコーン!!!!!!」

よろよろと立ちあがり、叫んだ。

その名は一角ではない。なのに、一角は反応した。

左手にあったコアは光だし、アルのもとへ飛ぶ。

遠距離からのコールに反応した一角を確認したアルは再びISを着する。

装甲には赤いライン。

そして次の瞬間、すべてが開いた。

リミッター解除

デストロイモードへ移行

右手をゆっくり背中へまわし、サーベルを勢いよく抜いた。

その瞳は冷たく、右手にある甲龍のコアだけを見つめている。

「っ・・・!ファンネル!!」

何かを感じ取った4枚羽はビット ファンネルを展開させる。
驚異的な加速を見せながら、アルは突っ込んできた。

そしてサーベルを一振り。ファンネルをいとも簡単に破壊する。

無数のビームの雨。

軌道に軌跡。それらを完璧に読みながら破壊して近づく。

一気に間合いを詰め、振り抜き。

4枚羽の羽の内、左前羽のほとんどを切り落とした。

「返せ……」

4枚羽はコアでふさがった右手を守るように、左手でサーベルを構え、アルの攻撃を受け止める。

小さくつぶやいたその言葉は届いていないだろう。

だがそんなの関係ない。

返してほしい、じゃない。奪い返す、なのだから。

バチッ！！

振り払われ、もう一度切りかかる。

そこから無理やりずらし、左手首ごと切り落とす。

逃げようとするところへ、がらあきの左手を伸ばし、ビームトンフ

アーを”90°”展開させ、腕をひねった。

そこにあつたのは甲龍のコアを持った右手。

切り落とした手首は重力に従い、落ちようとするがアルはしっかりとキャッチした。

「くっ……！」

追い打ちとわんばかりに右手のサーベルで再び斬りかかる。

だがそれは間一髪のところでは上空に避けられた。

そして4枚羽はそのまま胸に装備されたメガ粒子砲を拡散で撃つ。

「なに！？」

かわした。

何もせず少しだけ動き、かわす。

要らない動きは何一つない。

「ちっ！」

このままいけばやられる。

それを確信した4枚羽は撤退した。

アルは何かを諦めたか、深追いはしなかった。

ただ、空中でデストロイモードが解け、アルはそのまま地面に落ちて行った。

第12話 叫び（後書き）

次回は事後の話。

アル君が一夏と鈴の仲直りを見届けます。

そしてもう一方でも少し動きが・・・・・・？

誤字脱字、感想あればお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034x/>

IS 一角と少年 につ！

2011年10月9日22時58分発行